「直訳的」和文英訳指導
ー語順変換モデルによる和文分解を通じてー

山岡　大基

英語の発表技能の指導において和文英訳の意義が積極的に論じられることはまれになった。しかし，和文英訳の意義が否定されたわけではない。また，その指導法についても，「和文和訳」による「中間日本語」の生成を経て英語に訳すというプロセスが定石として確立している。ただし，そこでは，学習者が和文をパラフレーズする能力に英訳の成否が依存してしまうという問題点が残される。この点を補うために筆者が行った，「中間日本語」を生成する段階で和文のパラフレーズに依らない「直訳」的なプロセスの指導について，その概要を報告する。

1．和文英訳指導の意義

中学校・高等学校でのコミュニケーション志向の英語指導においては，ライティング技能の指導方法としての和文英訳が大々的に顧られることが少なくなった。たしかに，コミュニケーション能力の育成という目標に照らせば，「和文英訳の指導」を「ライティング指導」と同義に捉えることは不適切である。

その一方で，英語指導に関する専門的見解の中で和文英訳という指導法自体が否定されることは珍しい。年代別にいくつかの文献から引用する。

> 沖原(1985:24)
> 「いわゆる和文英訳は composition（作文）とはみなされないが，母国語からの訳が英語を書くことにつながっている限り，文をつくるヒントを与えてくれたり，日英語の類似点や相違点を学習者に明示してくれるなど，それなりの効用を持ったライティングの学習方法と言えよう。」
> 片山ほか（1994:232）
> 「この活動（和文英訳：筆者注）を軽視することは賢明ではあるまい。（中略）日本語で発想し表現する枠から完全に脱却はできないから，日英の発想や表現の差異を知ることは大切である。」
> 岡ほか（2004:120）
> 「和文英訳指導は，言語使用の質を高めるという点では有効です。」

1980年代から2000年代にかけて，一貫して和文英訳の意義そのものが否定されてはいないことがわかる。その主たる理由は，和文英訳が，文法・語法を定着させるための練習や，日英語の発想の違いを調整する訓練として機能することが認識されてきたことにある。

また，専門的な議論を外れても，「○○は英語では何と言うのだろう？」という素朴な疑問は語学の契機としてありふれたものであり，じっさい「日英対訳」の形式を採る英語教材は普及している。つまり，日本語を母語とする学習者にとっては，和文英訳という形式に即した英語学習は受け入れ易いものであると言える。

これらのことにより，英語指導の一環として和文英訳を活用することの意義が示されていると言える。

なお，上の引用にも見られるように，和文英訳には，大きく分けて，文法・語法の指導法という側面と，ライティングやスピーキングといった発表技能の指導法という側面の二面性が認められるが，本稿においては特に後者の側面に焦点を当てて論を進めたい。

2．指導実践に向けた理論的整理

2．1．和文英訳指導法の満たすべき要件

前項で述べたように和文英訳の指導には価値があるが，だからと言って和文英訳ばかりをすることが英語学習にとって効果的であるということにはならない。ライティング技能に限定しても，和文英訳では扱いきれないことがらは多い。それゆえ，和文英訳の指導にあたっては，できるだけ効率のよい指導法を採り，他の学習の妨げにならない工夫が必要である。

和文英訳の指導法はこれまでにも多くのものが提案されてきたが，その多くは「和文和訳」（＝和文のパラフレーズ）や「中間日本語」（＝英語の語順に並べ替えた和文）のような用語で表されるように，日本語的な発想で書かれた和文を，英訳しやすいように英語の発想に近い和文に書き換え，その上で英訳するというプロセスを経るものであった（e.g. 吉田・柳瀬（2003））。

そのような指導法は概して，元の和文の構造よりも，その文が伝えようとする意味を重視していることが特徴

である。つまり，和文の表面上の語句や構造にとらわれて word to word, phrase to phrase, sentence to sentence で直訳すること避け，むしろ和文が伝えたい意味内容を吟味し，それをあらためて英語で表現しなおす，という志向性を持つ。

このとき，学習・指導上の問題となりうるのが，いかにして「和文和訳」を行なったうえで「中間日本語」を生成するかである。なぜならば，そのような言語操作が機能するためには，学習者の視点から見ると，少なくとも次のような条件が満たされねばならないからである。

(1) 英語の語彙や文法の知識が，当該の和文を英訳するのに必要な程度，蓄積されている
(2) 元の和文を，中核的な意味を損なわない程度に，別の和文に言い換えることができる
(3) (1)の知識の範囲の英語で表現するために，(2)の言い換えをどのように行なえばよいかがわかる

これらの条件が全て満たされて初めて，適切な「中間日本語」が生成され，そのうえでの和文英訳が可能になる。したがって，和文英訳の指導にあたっては，(1)～(3)の条件が満たされるような手立てを講じる必要がある。

(1)に関しては，和文英訳に特化した指導というよりも，他の様々な機会を通じて，可能な限り多くの知識を学習者に与えることが必要である。少なくとも再認できる（「○○という表現・規則があったでしょう？」と問われれば，「ああ，そういえばありました」と思い出せる）程度にまで知識が定着していなければ，発表技能指導としての和文英訳は効果的ではありえないであろう。

(2)に関しては，和文英訳を行なうこと自体を通じて，和文をパラフレーズする能力が高められると言える。和文をパラフレーズする能力は，原理的には英語力とは無関係のものである。しかしながら，英語によるコミュニケーションにおいて，伝えたい内容を和文の形で発想した場合に，それを英語で表現しやすい形に変形することは，実際の英語使用場面においては要求されることが珍しくない。それを可能にする基礎として，1つの和文を多様にパラフレーズする力は必要である。和文英訳という活動を行うこと自体が，そのような能力を高める契機となると言える。ただし，和文英訳の過程において，この作業に依存する度合いが高まることには問題もある。そのことについては次項で論ずる。

(3)に関しては，元の和文やパラフレーズした和文を英語の語順に置き換えるための「語順変換モデル」がこれまでに提案されている。たとえば田地野（1999, 2008）は，

だれが／する／だれ・なに／どこ／いつ
（／どのよう（に））（／なぜ）

という語順の枠組みを提示し，この枠組みに沿って英文を構成することにより，意味伝達に支障のない英文を生成することが可能になることを実証している。このような既存のモデルを活用することにより，(2)における操作に方向性が与えられると考えられる。

以上のことから，特に和文英訳の指導という観点からは，(3)の側面がまず重視されるべきであり，それを契機として(1)(2)の側面に関する指導が発生すると言える。

2．2．直訳的プロセスの意義

上述のように，従来提唱されてきた指導法においては和文のパラフレーズという(2)の側面が強調されることが多かった。そのこと自体は，指導上の必然性に基づくことであるので，誤りではない。

しかしながら，元の和文を，ほぼ等価とみなせる別の和文に言い換えることが，和文英訳の過程においてどれほど機能するは，和文の難度や学習者の日本語の能力によって左右される程度が大きい。

たとえば，吉田・柳瀬（2003）は次のような例を示している。

「きのう駅でヒロシに会ったんだ。一緒にハンバーガーを食べたんだ。」

この下線部を英訳する場合，和文に主語が明示されていないことと，「一緒に」をどのように言い表すかということの2点を検討した結果，次のようなパラフレーズが可能であることがわかる。

(a) 僕たちは／食べた／ハンバーガーを
(b) 僕は／食べた／ハンバーガーを／ヒロシと一緒に

そして，これらは次のように英訳することができる。

(a) We ate hamburgers.
(b) I ate a hamburger with Hiroshi.

これら2例のうち，構造という観点において元の和文により忠実なのは(b)である。和文における「一緒に」という「名詞＋後置詞」の構造が，英語におけるパラレルな構造である “with Hiroshi” という「前置詞＋名詞」に置き換えられているからである。

一方，(a)では，「一緒に」を「僕とヒロシ」→「僕たち」に言い換えるという操作が行なわれているため，意味の面では和文とパラレルであるが，構造の面では和文とは異なる英文となっている。

これらの例の場合，和文が比較的単純な構造のものであり，(a)(b)どちらの発想を採っても，訳された英文は比較的単純なものとなる。したがって，(a)のような和文のパラフレーズも，多くの学習者にとって，それほど難度の高いものではないと思われる。

しかしながら，次のような和文の場合，和文のパラフレーズはそれほど容易ではない。

「大阪を中心とする上方文化には，現実的で経済性を重んじる気風があったのである。」
（大阪大学 2007 年度入学試験）

この訳文であるが，たとえば河合塾が公表している解答例は次のとおりである。

（解答例１） Kamigata culture, centered in Osaka, had a practical way of thinking and valued economic efficiency.
（解答例２） People in Osaka and neighboring areas tended to be very practical and economic-oriented.

これらについて，パラフレーズした和文が示されているわけではないが，英文を見る限り，和文のパラフレーズに等しい操作が行なわれていることがわかる。

解答例１においては，

「現実的で経済性を重んじる気風があった」
→「現実的な考え方があり，経済性を重んじていた」

解答例２においては，

「大阪を中心とする…あった」
→「大阪および周辺地域の人は」
「…気風があった」
→「…する傾向があった」
「上方文化」
→訳出なし

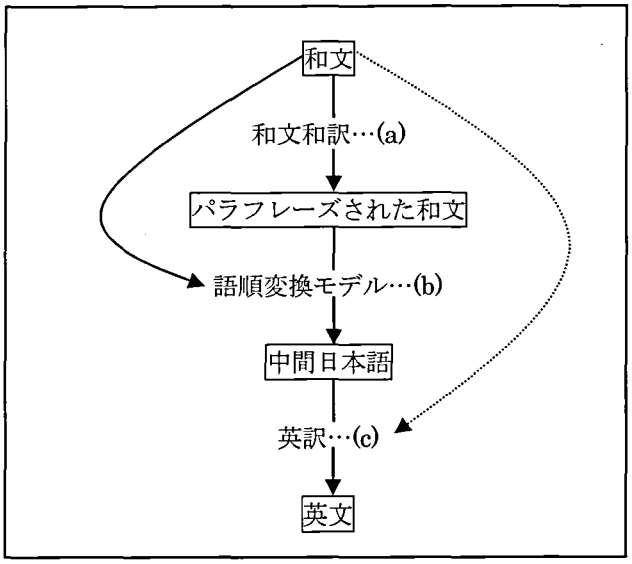
のように，和文がパラフレーズされている。

これらのパラフレーズは，日本語話者だからといって，必ずしもできるものではなく，むしろ訓練が必要とされるであろう。そして，学習者が和文を適切にパラフレーズできない場合には，英訳のプロセスがそこで止まってしまいかねない。あるいは，和文のパラフレーズ自体は行なうものの，元の和文の意味を大きく逸脱してしまうような不適切なパラフレーズをしてしまい，結果として不適切な英訳を生成してしまう場合もある。そのような事態を回避するためには，和文パラフレーズに可能な限り依存しない英訳の方法があることも指導しておく必要がある。より詳しく述べると，次のようなことである。下図のような和文英訳のプロセスにおいて，(a)への依存が大きくなりすぎると，(a)に失敗したときに，適切な状態で(b)に進むことができなくなる。しかし，実際は，下図において実線の曲線で示したプロセス，つまり(a)を経ずとも，直接(b)へと進むプロセスが可能な場合がある。たとえば，先に挙げた例のうち，

「現実的で経済性を重んじる気風」

の部分は，

「現実的な気風＋経済性を重んじる気風」



という和文の構造を保ったまま，

a spirit that was realistic and put emphasis on economy

のように英訳することが可能である。このプロセスは，和文の構造をできるかぎりそのまま，忠実に英文に置き換えていく，いわゆる直訳のプロセスである。この直訳により生まれた上の英文が，英語として不自然さの残るものであることは否めない。しかし，元の和文の意味をほぼ正確に伝えるという和文英訳の目的は達成されている。不適切な和文パラフレーズから不適切な英訳を生むよりは，許容範囲の英訳を導き出すことができるのであれば，直訳プロセスの方が実際的意義は高い。

このことに関連して，２点整理をしておく。まず，和文パラフレーズを重視する和文英訳プロセスは，この直訳的なプロセスが機能しないことが多いからこそ提唱されているものである。たとえば，

「日本語では，相手の意見に合わない，同意できない場合は，はっきりとはいわないで，少しお茶を濁したような言い方をする場合が多い。」
（大阪大学 2008 年度入学試験）

という和文は，次のような点で直訳が不可能である。

「日本語では…いわない…言い方をする」
→これ自体は非論理的な表現で，意味を考慮すると，「日本語文化においては」や「日本人は」のようにパラフレーズしなければならない。
「お茶を濁したような」
→日本語特有の慣用句であり，字義通りに英訳しては意味が通じなくなる。たとえば「直接的な表現を避ける」「ほのめかす」のようにパラフレーズしなければならない。

これらのように，たしかに和文のパラフレーズを経な

ければ英訳文を作ることができない場合はあり，したがって，和文パラフレーズおよび直訳を，場合に応じて使い分けることが重要であると言える。

もう１点は，ここで「直訳」と言うとき，意味するプロセスは上図における実線の曲線であり，破線ではないということである。和文の構造に忠実に英訳するとはいえ，日英語の構造の相違から，直接的な置換が許されない場合もあり，学習者が誤った英文を生成する危険性が高い。したがって，元の和文のパラフレーズはしないが，それ自体を英文の構造に沿うような語順に並べなおしたうえで英訳するほうが，誤りは少なくなることが期待される。そのため，上図における(b)語順変換モデルは経由させる必要があると言える。

このとき，語順変換モデルとしては，何が適切かという問題がある。これまでに複数のモデルが提案されているが，本稿においては，モデルの包括性という観点から，上述の田地野（1999）に依拠して以下の議論を進める。次項において，このモデルの運用法を概観する。

２．３．語順変換モデルの運用法

語順変換モデルは，田地野（1999）によれば，たとえば次のように運用される。(注)

元の和文：定期券をポケットに入れる。

中間日本語と英訳：

だれが	する	だれ・なに	どこ	いつ
私が	入れる	定期券を	ポケットに	
I	put	my commuter pass	in my pocket	

この場合，動詞 put の語法や，commuter pass という表現の知識が前提にあり，モデルの適用を通じて元の和文には表れていない「私が」という主語を和文に補う操作を経て，最終的に英文を生成している。

この例のように，元になる和文の構造が比較的単純であり，英文は単文で表すことができるような場合，モデルを１度適用するだけで中間日本語および英訳が生成されるが，より複雑な和文の場合，モデルを複数回適用する。

元の和文：彼はその指輪をマンハッタンの五番街にあるティファニーで買ったと私に言った。

中間日本語と英訳(1)：

だれが	する	だれ・なに	どこ	いつ
彼は	言った	私に・		
He	told	me・		

中間日本語と英訳(2)：

だれが	する	だれ・なに	どこ	いつ
(彼は)	買った	その指輪を	ティファニーで	
he	bought	the ring	at Tiffany's	

中間日本語と英訳(3)：

だれが	する	だれ・なに	どこ	いつ
ティファニーは	ある		マンハッタンの五番街に	
Tiffany's	is		on Fifth Avenue in Manhattan	

英訳(1)(2)(3)を単純に並べると

He told me
he bought the ring at Tiffany's
Tiffany's is on Fifth Avenue in Manhattan

となる。これらの部分を組み合わせると，最終的な訳文が完成するわけだが，単純につなげただけでは非文法的な英文となる。そこで，文法の知識を適切に適用して，最終的に次のような訳文となる。

He told me that he bought the ring at Tiffany's which is on Fifth Avenue in Manhattan.

このモデルの運用法を踏まえ，筆者による指導の概要を次節で報告する。

３．語順変換モデルによる和文英訳指導

３．１．語順変換モデルの設定

前節までの検討を踏まえ，筆者は，語順変換モデルとして次のようなモデルを設定した。

だれが なには	～する である	だれ	なに	どこ	いつ	どのよう	なぜ

このモデルは，基本的に田地野（1999）に依拠するものであるが，次の２点において改変を加えている。

(1) 「だれが」→「だれが・なには」および「する」→「～する・である」の置き換えを行なった。
(2) 「だれ・なに」を２つの独立した枠に分割した。

改変の理由であるが，(1)は，モデルの包括性を高めるためである。(2)は，モデルの運用法に一貫性を持たせるためである。田地野（1999）のモデルでは，二重目的語構

文の場合に限り，「だれ・なに」の枠１つで２つの要素を生成することとされている。しかし，筆者が扱う限り，その規則が学習者に了解されにくいという問題点があった。そこで，１つの枠で１つの要素を生成するという点でモデルが一貫するようこの改変を行った。

３．２．語順変換モデル運用の実際

指導にあたっては，次の原則を生徒に対して確認した。

元の和文を，そのまま英語の語順に置き換え，英訳することができないかを，まず検討する。元の和文そのままでは英訳することができないとわかったら，そこで初めて，元の和文がパラフレーズできないかを検討する

具体的なプロセスは，たとえば次のようになる。なお，中間日本語を生成する枠組みは，必要な部分だけを示す。

元の和文：この町の環境汚染の原因が，あまりに急速な工業化にあることは周知の事実です。

中間日本語(1)：

だれが なには	~する である	なに
この町の環境汚染の原因が，あまりに急速な工業化にあること	です	周知の事実

↓ この部分についてモデルを再適用

中間日本語(2)：

だれが なには	~する である	なに
この町の環境汚染の原因	にある	あまりに急速な工業化

まず，ここまでは元の和文に変更を加えることなく，語順変換モデルの適用のみを行ってきた。中間日本語(1)の「だれが・なには」の枠の和文がまだ英語の語順へと分解されていないので，モデルを循環適用して中間日本語(2)を生成した。この時点で，たとえば次のように英訳文を作ることができる。

英訳(2)：

だれが なには	~する である	なに
the cause for the environmental pollution in this town	lies in	the [its] too rapid industrialization

英訳(1)：

だれが なには	~する である	なに
That + ［英訳(2)］	is	a well-known fact

英訳：

That the cause for the environmental pollution in this town lies in the too rapid industrialization is a well-known fact.

この英文はぎこちなさの残るものであるが，文法的であり，元の和文の意味を伝えるものとなっている。より整った英文にするのであれば，形式主語の it を用いて，のように書き換えるなどの操作が可能である。

It is a well-known fact that the cause for the environmental pollution in this town lies in the too rapid industrialization.

また，学習者によっては，中間日本語(2)の時点で残っている「この町の環境汚染の原因」「あまりに急速な工業化」「周知の事実」などの表現が英訳できない場合がある。そのような場合は，語順変換モデルを再適用する。

中間日本語(3-1)：

だれが なには	~する である	どこ	なぜ
環境が	汚染された	この町で	なぜか なぜならば

中間日本語(3-2)：

だれが なには	~する である	どのよう
この町が	工業化した	あまりに急速に

中間日本語(3-3)

だれが なには	~する である	なに
だれもが	知っている	その事実を

この段階で，元の和文の構造を離れて，

「この町の環境が汚染されたのは，この町があまりに急速に工業化したからだという事実を誰もが知っている」

のようなパラフレーズが可能であることが明らかになる。そこで，中間日本語をそれぞれ英訳すると，

(3-1) the environment was polluted in this town because...
why the environment was polluted in this town
(3-2) this town was industrialized too rapidly
(3-3) everyone knows the fact
a fact that everybody knows

のようになり，これらを組み合わせて，たとえば

Everyone knows that the environment in this town was polluted because it was industrialized too rapidly

のような英文を作ることができる。

3．3．生徒によるモデル運用の具体

前項で示したような語順変換モデルの運用法を例示したうえで，生徒自身にこのモデルを運用しての和文英訳を練習させる指導を継続的に行なった。その過程で，生徒がこの方法による和文英訳をどのように行なっていたのかの具体的な様子を，主に生徒のメモ書きにより観察した。示された運用法に忠実に和文英訳を進めようとする生徒も多かったが，中には，自分なりの工夫を加えて運用している例もあった。それらの中から２例を示す。

(1)

元の和文：大阪を中心とする上方文化には，現実的で経済性を重んじる気風があったのである。
中間日本語：・気風が／あった
・大阪を中心とする上方文化／あった／現実的で経済性を重んじる気風
・上方文化＋それは／中心とする／大阪
・気風＋それは／重んじる／現実性と経済性
英訳：Kamigata culture which mainly developed in Osaka had atmosphere which emphasized realistic and economical.

この生徒の場合，前項で示したような循環適用を行なっているが，その際「上方文化＋それは／中心とする／大阪」のような独自の書き方をしているのが特徴的である。これは，最終的な英訳で必要となる構造（関係代名詞）に見積もりがあったことによると推測される。また，「現実的で」を「現実性」と言い換えて構文を作ろうとする姿勢もうかがえる。結果として訳された英文には品詞の誤りが生じてしまっているが，語順変換モデルの適用を契機に和文のパラフレーズへの意識が生まれていることも見て取れる。

(2)

元の和文：考えてみれば，常識の違いに戸惑うということが，私にはあんまりない。
中間日本語：私には／あんまりない／戸惑うということが／常識の違いに／考えてみれば
英訳：I don't often get confused by difference in common sense come to think of it.

この生徒は，「常識の違いに戸惑う」の部分を，２回に分けずに１度のモデル適用で書き出している。モデルに厳密に従えば，「戸惑うということが／常識の違いに」という分割はできないが，この生徒にとっては，(1)の生徒と同様に，中間日本語を書き出している時点で，ある程度，最終的な英訳の構造が想定できていたため，このように書いたものと推測される。じっさい，前項で示したようなモデルの運用法は理論的なものであり，現実にはこの生徒のように，複数回のモデル適用を同時並行的に処理する場合も多いであろう。

4．まとめ

本稿では，和文英訳において，和文のパラフレーズに依存するのではなく，元の和文をそのまま英語の語順に置き換えることから始める指導法について述べた。学習者の日本語力に依存しないという点で，習熟度の異なる学習者を指導する際に，ぜひ考慮すべき点であると筆者は考える。

［注］

田地野（1999）は，このモデルに対して「中間日本語」という用語は用いていないが，この用語を肯定することは明言しているため，便宜上この用語を使用する。

［引用文献］

岡秀夫・赤池秀代・酒井志延．2004．『「英語授業力」強化マニュアル』．大修館書店．
沖原勝昭．1985．『英語のライティング』．大修館書店．
片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男．1994．『改訂版　新・英語科教育の研究』．大修館書店．
田地野彰．1999．『「創る英語」を楽しむ』．丸善．
田地野彰．2008．「新しい学校文法の構築に向けて－英文作成における「意味順」指導の効果検証－」奈良女子大学国際交流センター『平成 20 年度英語の授業実践研究』pp.8-21 所収．
吉田研作・柳瀬和明．2003．『日本語を活かした英語授業のすすめ』．大修館書店．